ハイチ・ハリケーン被害

継続的な支援訴え

AMDA帰国医師ら

大型のハリケーンに見舞われた中米ハイチでの緊急医療活動を終えた国際医療ボランティアAMDA（岡山市北区伊福町）のメンバー2人が28日、同市内で報告会を開いた。コレラ感染が広がる現地の状況などを紹介し、継続的な支援の必要性を訴えた。

報告したのは医師の佐藤拓史さん(51)＝岡山市出身、福岡市在住＝と調整員の松永健太郎さん(30)＝岡山市。佐藤さんは14日から、松永さんは8日からハイチ南西部を中心に診療活動や感染症予防などに当たり、いずれも27日に帰国した。

佐藤さんは、AMDAが現地にコレラ治療センターを開設したことに触れ「衛生、栄養面の悪化で患者が急増している。医療従事者や食料が不足し、一層の支援が必要」。松永さんは「町中にがれきが散乱し、住人はテント生活を送っている。悲惨な状況下でのコレラ流行は深刻な問題だ」と話した。会見には菅波茂代表も同席した。

AMDAによると、ハリケーンによる死者は500人以上、被災者は約210万人。AMDAは28日までに佐藤さんや松永さんら17人を現地に派遣した。

（大橋洋平）